

広島市の文化財第13集

空長古墳群  
発掘調査報告書

1978. 3

広島市教育委員会

## 序 文

広島市は最近都心部から郊外への人口流出が盛んで、自然環境に恵まれた郊外の丘陵地帯では、大規模な宅地造成が進められ、

そこに分布する埋蔵文化財の現状保存を困難なものにしています。

昭和52年の秋に、広島市教育委員会が発掘調査を行いました広島市祇園町大字西山本の空長古墳群も開発予定地の丘陵上に位置していました。

本格的な発掘調査は、地元祇園町では初めてのこととあって町内の関心は高く、発掘作業から出土品の整理、祇園公民館での調査報告会に至るまで、多数の方々の協力が得られたことは大変幸せでした。

今回の発掘調査において広島市にとって、新たな遺構、貴重な出土品の発見もあり、大きな成果をおさめることができました。

本書が地域における古代史解明の手がかりとなり、更に郷土理解を深めるための一つの機縁となるよう願ってやみません。

おわりに今回の調査に対し、ご指導を賜りました諸先生方および協力くださった地元の多くの方々に厚くお礼申し上げます。

昭和53年3月

広島市教育長 富永治郎

## 例　　言

- 1 この報告書は宅地開発工事に伴い、昭和52年10月から53年1月にかけて実施した空長古墳群の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は泰久興産株式会社から委託を受けて、広島市教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆は石田彰紀が担当し、有谿盈雄、柳川康彦がこれを編集した。
- 4 本書掲載の航空写真は、はにわ会会員井手三千男氏より提供を受けた。
- 5 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の25,000分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭和53年複、第58号

# 目 次

第1章 序 説	
1. 発掘調査に至るまで .....	1
2. 調査の経過 .....	1
第2章 古墳群の位置と環境 .....	4
第3章 第1号墳	
1. 古墳の構造 .....	7
2. 主体部の構造 .....	7
3. 遺 物 .....	9
4. 小 結 .....	14
第4章 第2号墳	
1. 古墳の構造 .....	18
2. 主体部の構造 .....	18
3. 遺 物 .....	18
4. 小 結 .....	23
第5章 第3号墳	
1. 古墳の構造 .....	24
2. 主体部の構造 .....	24
3. 遺 物 .....	25
4. 小 結 .....	25
第6章 第4号墳	
1. 古墳の構造 .....	26
2. 主体部の構造 .....	26
3. 遺 物 .....	26
4. 小 結 .....	29
第7章 須 恵 器 .....	30
第8章 結 語 .....	36

## 図 版 目 次

- 卷首図版 空から見た空長古墳群
- 図版 1 1. 空長古墳群遠景（中央↓印）  
2. 空長古墳群近景
- 図版 2 1. 空長古墳群全景（北より）  
2. 空長第1号墳全景（南より）
- 図版 3 1. 空長第1号墳全景  
2. 空長第1号墳主体部全景（表土を除いたところ）
- 図版 4 1. 空長第1号墳主体部全景（遺物出土状態）  
2. 空長第1号墳主体部内鉄劍出土状態
- 図版 5 1. 空長第1号墳主体部内蛇行剣身出土状態  
2. 空長第1号墳主体部内金銅製三輪玉、有孔円板出土状態
- 図版 6 1. 空長第1号墳主体部の横口部  
2. 空長第1号墳墳丘全景
- 図版 7 1. 空長第2号墳全景（調査前）  
2. 空長第2号墳全景（調査後）
- 図版 8 1. 空長第2号墳主体部全景（表土を除いたところ）  
2. 空長第2号墳主体部（調査後）
- 図版 9 1. 空長第2号墳主体部内遺物出土状態  
2. 空長第2号墳墳丘全景
- 図版 10 1. 空長第2号墳周濠内（南東部）須恵器出土状態  
2. 空長第2号墳墳丘裾（西側）須恵器出土状態
- 図版 11 1. 空長第3号墳全景（調査前）  
2. 空長第3号墳全景（調査後）
- 図版 12 1. 空長第3号墳主体部全景  
2. 空長第3号墳主体部残存状態
- 図版 13 1. 空長第4号墳全景（調査前）  
2. 空長第4号墳全景（調査後）
- 図版 14 1. 空長第4号墳主体部全景  
2. 空長第4号墳主体部内直刀出土状態
- 図版 15 1. 空長第4号墳主体部の横口部積石状態  
2. 空長第4号墳周濠（西側）
- 図版 16 第1号墳出土遺物
- 図版 17 第2号墳・第4号墳出土遺物
- 図版 18 空長古墳群出土須恵器

## 挿図目次

第 1 図	空長古墳群の位置と周辺の主要古墳	折り込み 1
第 2 図	祇園町長束出土倣製鏡および伝光見寺跡出土鏡瓦拓本	6
第 3 図	遺跡地形実測図	折り込み 2
第 4 図	空長古墳群実測図	折り込み 3
第 5 図	第 1 号墳石室実測図	8
第 6 図	第 1 号墳遺物分布図	9
第 7 図	鉄劍実測図	10
第 8 図	三輪玉・有孔円板・ガラス玉実測図	11
第 9 図	鉄器実測図	13
第 10 図	第 2 号墳遺物分布図	18
第 11 図	第 2 号墳石棺実測図	19
第 12 図	直刀実測図	20
第 13 図	鉈・鎌・刀子・鉄鏃実測図	22
第 14 図	第 3 号墳石棺実測図	24
第 15 図	第 4 号墳石室実測図	27
第 16 図	第 4 号墳遺物分布図	28
第 17 図	直刀実測図	28
第 18 図	空長古墳群出土須恵器（壺・高壺・直口壺）実測図	30
第 19 図	空長古墳群出土須恵器（中型甕）実測図	31

## 付 表 目 次

付表1 太田川下流域における前期・中期の古墳地名表 .....	5
付表2 第1号墳出土ガラス玉計測表 .....	12
付表3 金銅製三輪玉出土古墳地名表 .....	15
付表4 広島県有孔円板出土古墳地名表 .....	16
付表5 空長古墳群出土須恵器一覧表 .....	32

# 第1章 序 説

## 1. 発掘調査に至るまで

広島市教育委員会では、昭和51年9月、泰久興産株式会社より広島市祇園町西山本地区の宅地開発予定地内にある空長古墳群の扱いについて協議を受けた。これについて広島市教育委員会では、県教育委員会および泰久興産株式会社と再三にわたり協議を重ねた。しかし、結局のところ古墳群が開発予定地内のあることから、設計変更は無理であり、記録保存もやむなしとの判断がされ、昭和52年初夏を目標に広島市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

昭和52年4月より当該発掘調査の準備に取りかかったが、諸般の事情により発掘調査の実施が約5ヶ月も遅れ、10月5日より約2ヶ月の予定で調査を開始した。

なお、発掘調査の対象となった空長古墳群の内容は、当初箱式石棺3基と予想されていたものである。

## 2. 調査の経過

### (1) 調査団の組織

発掘にあたっては下記のメンバーで臨んだ。

調査委託者 泰久興産株式会社

調査主体 広島市教育委員会

調査担当係 広島市教育委員会社会教育部社会教育課文化財係

調査者 成田 鍼雄（社会教育課長）

有谿 益雄（社会教育課文化財係長）

箕浦 興宏（社会教育課庶務係主査）

柳川 康彦（社会教育課文化財係主事）

石田 彰紀（社会教育課文化財係主事、調査主任）

浅川 伸二（社会教育課庶務係主事、事務担当）

調査補助員 内田 義人（祇園町長東地区・発掘作業）

大下 順三（タ 南下安地区 タ）

小笠原 誠（タ タ タ）

倉前 敏磨（タ 東山本地区 タ）

河野 悟（祇園町東山本地区・発掘作業）

谷田 芳夫（タ タ タ）

為定 照男（タ 長東地区 タ）

浜田 守三（タ タ タ）

堀口 龍彦（タ 南下安地区 タ）

養祖千代人（タ 東山本地区 タ）

北村 潤子（タ 長東地区・整理作業）

坂尾 昭子（タ タ タ）

島 圭子（タ タ タ）

寺下 節子（タ タ タ）

広安 佳子（タケミツコ）

名井 熙子（タケミツコ）

なお、このほか調査委託者である泰久興産株式会社、地元祇園町の田口為雄氏、早田正照氏、三篠町の三野丈一氏および祇園公民館谷田稔夫館長ほか職員の方々には調査を円滑に進めるために多大な配慮をいただいた。また、発掘調査の実施と報告書の作成にあたっては、国学院大学文学部考古学研究室、広島大学文学部考古学研究室、広島県教育委員会文化財課、広島市文化財審議会委員松崎寿和、広島市立工業高校教諭善入義信、可部郷土史研究会会員松浦譲二の諸氏から教示を受けた。ここに記して謝意を表したい。

## （2）調査の経過

調査の経過については下記のとおり略記するにとどめたい。

昭和52年

9月 1日～	9月30日	発掘調査の準備
9月30日		発掘関係者打合せ（於 祇園公民館）
10月 5日		発掘調査開始
10月 5日～11日		雑木伐採
10月12日～15日		地形測量
10月14日～21日		トレンチ設定・掘り下げ
10月24日～		第1号墳調査
10月31日～		第2号・第3号墳調査
11月11日～		第4号墳調査
11月21日～12月19日		発掘調査中断
12月20日		調査再開（補足調査）
12月27日		調査終了（補足調査）

昭和53年

1月18日	整理作業・報告書作成開始（於 祇園公民館）
1月27日	第2号墳の主体部を祇園公民館の中庭へ移転復元
2月 5日	発掘成果報告会 (於 祇園公民館「ぎおんひろば」)
3月	報告書刊行

## 第2章 古墳群の位置と環境

空長古墳群は、広島市祇園町大字西山本字空長にあって、標高356.0mの景浦山の北端から派生した小丘陵の尾根上に位置している。この丘陵は比較的なだらかで、遺跡の最高所の標高は92.5m、眼前に祇園町とその周辺が一望できて、古墳築造者の意図が当然のごとく感じられる。

古墳群は4基の円墳からなり、それぞれ南から1・4・2・3号墳と名付けた。このうち、前二者は竪穴系横口式石室を内部主体とし、後二者は箱式石棺を内部主体とするものである。

空長古墳群のある山本地区は、祇園町の西に大きく湾入した形で、太田川をはさんで東の戸坂町と対峙する。太田川は往古よりしばしばその流路を変えており、現在でいうところの古川は、その一旧流である。

ところで、この太田川は古代においては安芸・佐伯両郡の郡界をなしており、祇園町東原・西原および戸坂町が倭名類聚鈔にみえる安芸郡幡良郷、祇園町祇園、山本および長束の一帯が佐伯郡伊福郷、桑原郷に比定される地域であり、現在なお、航空写真や地形図等により条理地割と考えられる方格状土地区画を認めることができる。

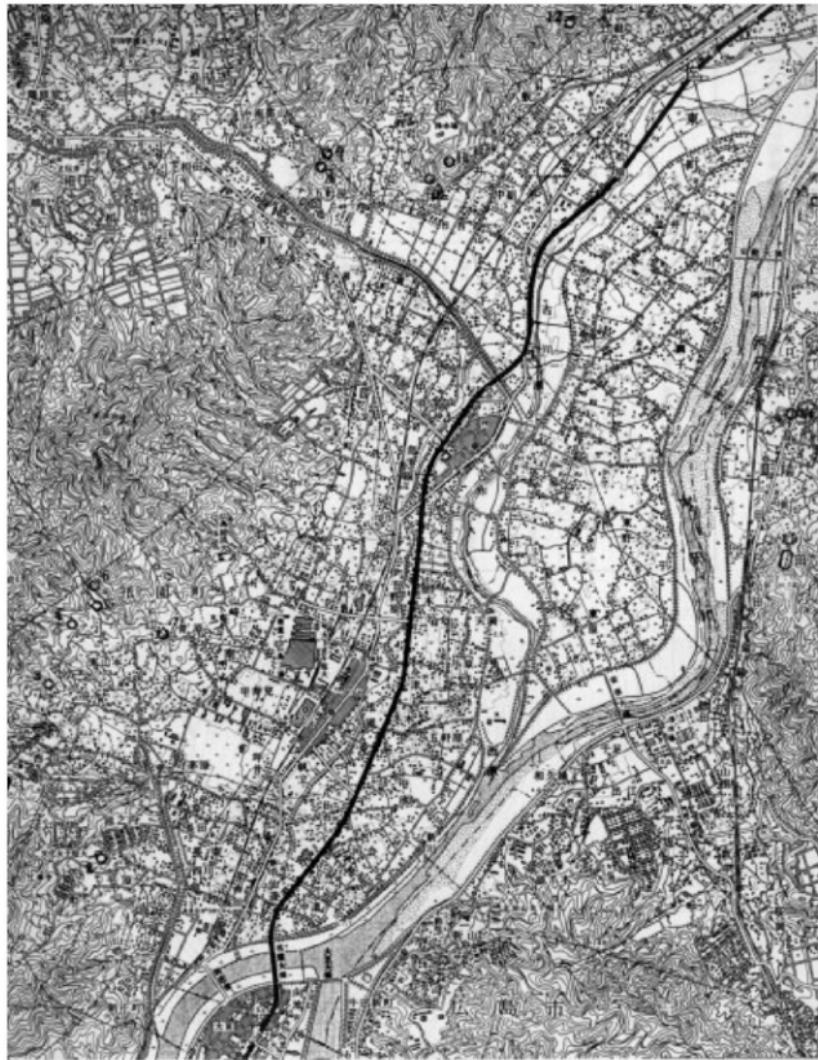
さて、昭和3年土取り工事中に発見され、獸形鏡や鉄鋌など多数の遺物を出土した東山本の三王原古墳は、空長古墳群の北東約1.4kmの丘陵上にある。この三王原古墳は河原石積みの竪穴式石室を内部主体とする前半期の古墳（円墳？）として知られ、その築造の時期は五世紀中葉とされている。また、空長古墳群の南東約0.8kmの長束地区広島文化女子短期大学敷地内からは、学校用地の造成工事中に倣製三角縁神獸鏡が発見されている。（第3図）この倣製三角縁神獸鏡は、発見者に言によれば若干の玉類とともに箱式石棺内に埋置されていたといわれるものの、出土状況その他の詳細は不明である。このほか、山本地区では武田山南山麓の浄円寺古墳群（3基）・部谷山古墳群（2基）・上組古墳などがあげられるが、これらはいずれも横穴式石室を内部主体とする円墳である。

以上、空長古墳群に近接する山本地区周辺の古墳を列記したが、空長古墳群は後で述べるように一応は中期古墳の範疇に属するものと考えてよいようである。そこで、太田川下流域における前期と中期の古墳とされているものをひろいあげてみると付表1のとおりである。

そこで、太田川下流域における前期と中期の古墳とされているものをひろいあげてみると付表1のとおりである。

地図 記号	名 称	所 在	墳 形	主体部	副 墓 品	非定時期
(1)	中小田 第 1 号 墳	広島市高陽町中小田	円	割 石 構 み 堅 穴 式 石 室	三角縁神抵鏡、楕形鏡、鉄劍、鉄刀、鉄斧、勾玉、菅玉	4世紀後半
(2)	神宮山 第 1 号 墳	広島市佐東町綾井	円	割 石 構 み 堅 穴 式 石 室 3	A 主体 鉄劍、鉄鎌、菅玉、小玉 B 主体 内行花文鏡片、菅玉、小玉、算盤玉 C 主体 勾玉、菅玉、小玉、算盤玉	4世紀後半
(3)	西願寺 D 第 1 号 石室	広島市高陽町矢口	?	河 原 石 構 み 堅 穴 式 石 室	鑿、鉄斧	5世紀初頭
(4)	宇那木山第 2 号 墳	広島市佐東町綾井	?	割 石 構 み 堅 穴 式 石 室	圓文鏡・神抵鏡	5世紀前半
(5)	中小田 第 2 号 墳	広島市高陽町中小田	円	割 石 構 み 堅 穴 式 石 室	素文鏡、短甲、鉄劍、鉄刀、鉄鎌、鉄斧、鍔、鍔先	5世紀前半
(6)	西願寺 D 第 2 号 石室	広島市高陽町矢口	?	河 原 石 構 み 堅 穴 式 石 室	鉄劍、刀子、鉄斧、鑿、鍔、●	5世紀前半
(7)	三 王 墓 古 墳	広島市紙園町東山本	?	河 原 石 構 み 堅 穴 式 石 室	楕形鏡、鉄劍、鉄鎌、鉄鎌、鉄●、金環、勾玉、菅玉、小玉、甲冑片、馬具片	5世紀中葉
(8)	上 小 田 古 墳	広島市高陽町上小田	円	箱 式 石 棺	鉄劍、鉄刀、鉄斧、鍔	5世紀中葉
(9)	白 山 第 1 号 古 墳	広島市安古市町白山	?	箱 式 石 棺	短甲、鉄槍、鉄刀、鉄斧	5世紀後半
(10)	白 山 第 2 号 古 墳	広島市安古市町白山	?	箱 式 石 棺	勾玉、菅玉、鉄鎌、刀子	6世紀前半
(11)	神宮山 第 2 号 墳	広島市佐東町綾井	?	箱 式 石 棺	鍔、鍔先、須恵器	6世紀前半

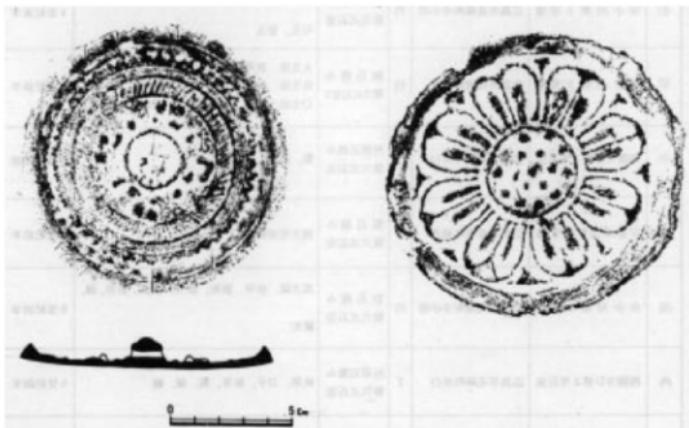
付表1. 太田川下流域における前期・中期の古墳地名表  
(第1図に含まれない地域のものについては割愛した。)



第1図 空長古墳群の位置と周辺の主要古墳

- |                  |                |                 |
|------------------|----------------|-----------------|
| 1. 空長古墳群         | 2. 傲製三角縁神獸鏡出土地 | 3. 光見寺跡         |
| 4. 淨円寺古墳群        | 5. 上組古墳        | 6. 部谷山古墳群       |
| 7. 三王原古墳（7）      | 8. 白山第1号墳（9）   | 9. 白山第2号墳（10）   |
| 10. 神宮山第2号墳（11）  | 11. 神宮山第1号墳（2） | 12. 宇那木山第2号墳（4） |
| 13. 西願寺山墳墓群（3,6） | 14. 上小田古墳      | 15. 中小田古墳群（1,5） |
- （ ）内は地名表対照番号を示す。

さて、山本地区周辺の古墳の経済的背景が、前述の条理地割の実施を可能たらしめた肥沃な可耕地にあることはいうまでもないことで、祇園町内の古墳が長束地区の一例を除いて山本地区の湾入部に集中していること、また奈良時代の瓦を出土する光見寺跡(第3図2)の存在をも考え合わせるとき、山本地区はきわめて注目すべき地域であることがわかるだろう。

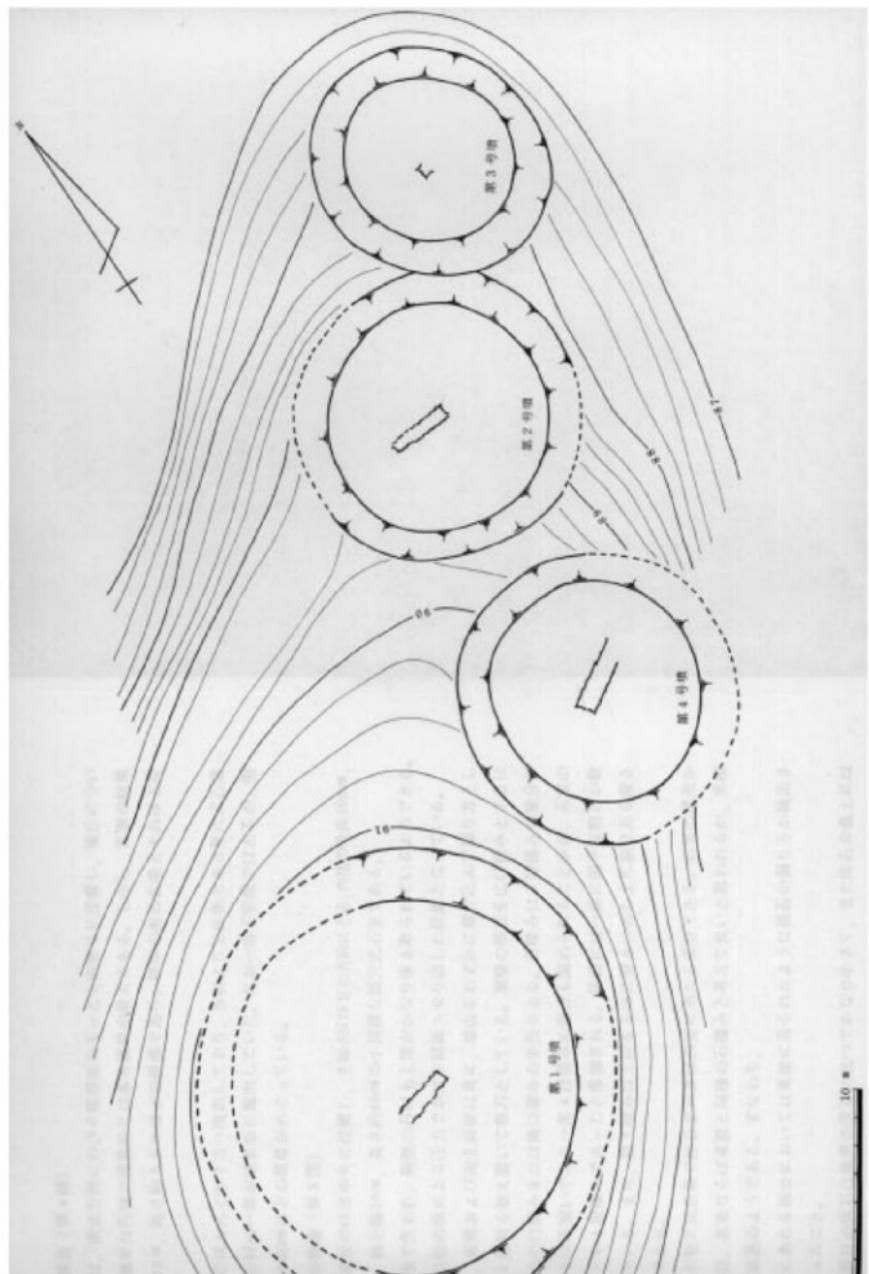


第2図 祇園町長束出土 倣製鏡および伝光見寺跡出土鐘瓦拓本

- 注1 広島市役所編『新修広島市史 第1巻 通史編』(1961)。  
祇園町教育委員会編『祇園町誌』(1970)。
- 注2 中田 昭「広島市祇園町三王原古墳について」(『芸備』第1集, 1973)。
- 注3 福谷昭二「太田川下流域の古墳分布と二・三の問題点」  
(『広島県立観音高校研究紀要』第6号, 1969)。
- 注4 発見者である笠井右治, 笠井誠一両氏の教示による。
- 注5 祇園町教育委員会編『祇園町誌』(1970)。



第3図 遺跡地形実測図



第4図 空長古墳群実測図

## 第3章 第1号墳

### 1. 古墳の構造（第4図）

第1号墳は、南北方向にのびる尾根部のもっとも南寄りに位置し、墳丘についてみれば、墳形は円墳で視覚的には本古墳群中最大である。しかし、実測の結果では、直径13m、高さ約1.5mほどの規模であり、郡中の他の古墳とそれほど変わらない。

封土はそのほとんどが下方へ流出しており、当初より主体部である竪穴式石室を構成する石材の一部が地表面に露出していた。なお一部不明瞭であるが、幅200cm、深さ30cmほどの周濠がめぐっている。

### 2. 主体部の構造（第5図）

主体部は丘陵のほぼ中央に位置し、主軸をN75Eの方向にとる、内法の全長195cm、最大幅57cm、最小幅36cm、高さ約40cmの小規模な竪穴式石室である。

天井石は全て失われ、側壁の石材も上部がかなり抜き取られているようである。また、北壁は松の根による圧力でかなり前面へせり出した状態となっている。

構築法は、東壁および南北両壁は共に、地山をわずかに掘り込んで掘り方とし、積み石の第1段目を据え置いてとしている。東壁の根石を広口積みとするほかは、割石の小口積みまたは横積みの手法をとる。石積みは3段積みの部分が多いが、高さは不揃いであり一部4段積みの部分も認められることから、石室の旧状は少なくとも4段積みであったと推測される。床面には一面に扁平な割石が敷きつめられている。また、控え積みは土砂を主体に突きつめた上に割り石を置き並べたものである。

さて、この竪穴式石室では注目すべきは西壁あたる部分である。石室の構造からみて西壁は、本来ならば東壁と同様の石積みと考えて良いと思われるが、実際には異なる構造のようである。すなわち、

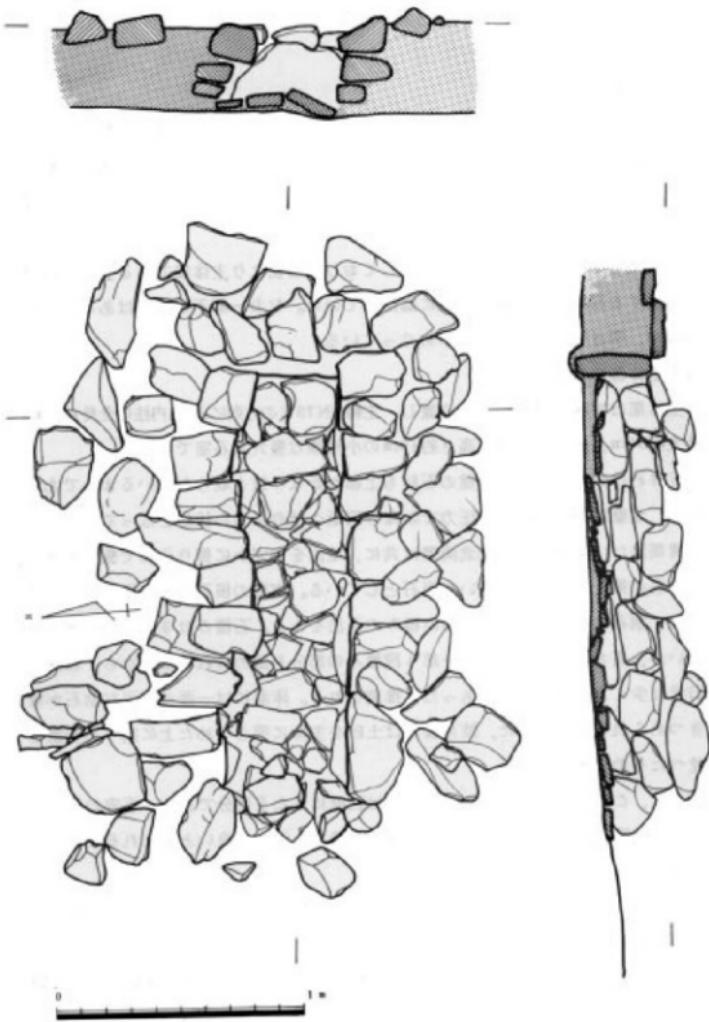
(1) 西壁にあたる部分においては東壁に見られたような根石の掘り方が検出されなかったこと。

(2) 西壁部分の床石は他所の床石に比べてかなり小さく、また床石の直上にはこぶし大の角礫の散乱が見られたこと。

(3) 南北両壁のもっとも西寄りの割り石が内側に突出した状態で地山直上に置いただけのもので2段目以上の積み石をもたないこと。

などの特徴が観察されたが、このことは第4号墳においては更に顕著であり、第4号墳の主体部における西壁は、10~20cm大の角礫と土砂とを積み上げた閉塞構造のものであった。

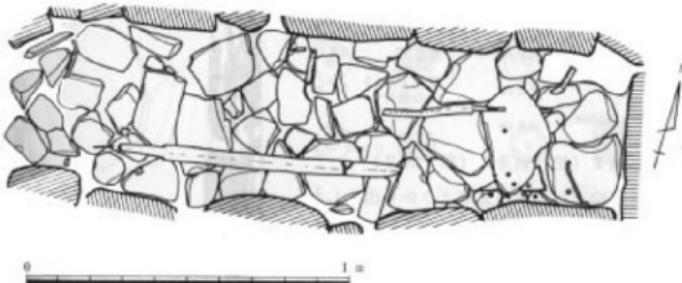
以上の諸点は、本主体部がいわゆる竪穴系横口式石室ではないかということを予想させるものである。



第5図 第1号墳石室実測図

### 3. 遺物

天井石が抜き取られていたにもかかわらず、本主体部内から出土した遺物は、ほとんど原位置を保った状態で発見された。遺物は石室の東寄りと西寄りの2ヶ所に分けて静置されたようで（第6図），前者には蛇行剣身，ガラス玉，後者には，剣，鉄鎌，三輪玉，有孔円板などが含まれる。このほか，棺具と考えられる鉄製カスガイも出土している。



第6図 第1号墳遺物分布図

以下，それぞれの遺物について詳述しよう。

#### 鉄剣1

鋒を東に向けて，石室の南西よりから出土したこの鉄剣は，現存全長86.3cmによよぶ見事な長剣である。鋒をわずかに欠損し，鋒より15cmのところで折損するが全体的に保存はきわめて良好である。また刀部にはほとんど全面に木鞘の木質が残っている。また茎尻より3.7cmの茎中心線あたりに直径4mmの目釘孔1が認められる。

なお、この鉄剣に関し注目されることは、茎尻に近接して、三輪玉とおぼしき金銅製品1個が出土している点である。

剣の各部の計測値は次のとおりである。

現存全長 86.3 cm (推定全長 87.2 cm)	
刃部	茎部
長さ 間部 72.3 cm	長さ 14.0 cm
幅 中央 4.4 cm	幅 茎尻より 4.5 cm
鋒より 10cm 4.0 cm	cm の部分
の部分	
厚さ 間部 0.9 cm	厚さ 間部 0.8 cm
中央 1.0 cm	茎尻より 4.5 cm
鋒より 10cm 0.8 cm	cm の部分
の部分	

#### 鉄剣2（蛇行剣身）（第7図2）

鋒を西向きに石室内北東よりから出土した鉄剣2は形態分類上、蛇行剣身あるいは曲身剣と称される種類のものである。すなわち、剣身はゆるやかなS字を描いて二曲し、鎬を中心として左右不对称をなす。鋒をわずかに欠損するほかはほぼ完形であり、刃部には木鞘の木質が全面に良く残っている。また茎部においても柄木が残り、これに直径0.5~1.0 mmの細紐を繁巻きに柄巻きした痕跡が明瞭に観察され、目釘穴は直径2 mmほどのものが1ヶ所認められる。



第7図 鉄剣実測図

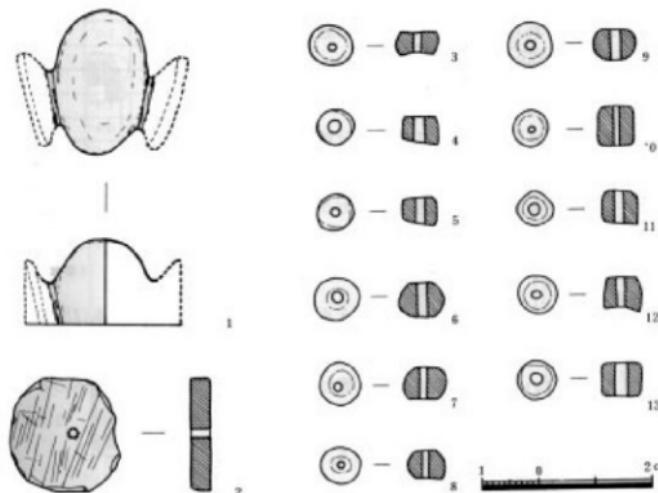
刃幅および刃厚は関部で最大値を示し、鋒に近くなるにつれ、その値は小さくなっている。

鉄剣の各部の計測値は以下のとおりである。

現存全長	37.7 cm	(推定全長)	38.0 cm
刃部 長さ	26.8 cm	茎部 長さ	9.5 cm
幅		幅	2.0 cm
関部	3.0 cm		
鋒より 4cm	2.0 cm		
の部分			
厚さ		厚さ	0.3 cm
関部	0.6 cm		
鋒より 4cm	0.4 cm		
の部分			
厚さ			

### 三輪玉（第8図1）

鉄剣1の茎尻近くから出土した金銅製品は、その位置や形態などから推して三輪玉と考えられる。三輪玉の発見例のほとんどは刀に伴うが、本例の場合、剣に伴っているという点においてきわめて珍しいといえよう。



第8図 三輪玉・有孔円板・ガラス玉実測図

この金銅製三輪玉は全体の約2／3を検出することができたが、保存状態はきわめて脆弱で、取り上げることが困難な状態であった。しかし、発見当初の状況および他の出土例などから、そのおよその規模・形態を復元することは可能でその概略を示せば、長さ3.1cm、最大幅2.5cm、くびれた部分の幅1.0cm、高さ1.5cmほどの大きさである。造りはきわめて薄い銅地に鍍金を施した中空のもので、鍍金は全体的に良く残っている。

#### 有孔円板（第8図2）

剣1の茎部に近接して出土し牛田早稻田遺跡近景牛田早稻田遺跡近景孔円板は、滑石製の単孔のもので、長径2.0cm、短径1.8cmの不整円形をしている。中新をややはすれて径1.5mmの孔を穿ち、厚さは3.5mmを測る。両面には製作時のものと考えられる擦痕が認められる。

#### ガラス玉

石室内の東南隅よりガラス玉11個が集中して出土した。これらのガラス玉はその形態から、扁平な感じのもの（第8図3～5）、丸味をもったもの（第8図6～9）、たて長な感じのもの（第8図10～13）の三種に分類ができる。色調はいずれも紺色でガラス玉9と10は若干の風化が認められる。なお、ガラス玉の大きさは付表2のとおりである。

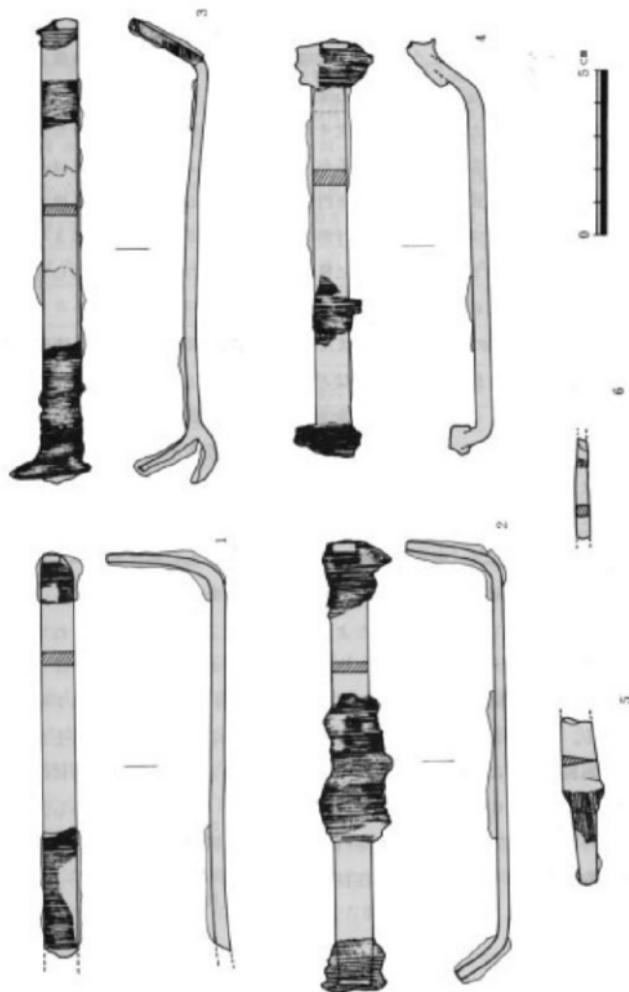
番号	長さ	外径	孔径	備考
3	4.2	7.8	1.5	透明
4	4.8	6.7	2.0	
5	5.0	6.5	1.6	
6	6.0	8.0	1.6	
7	5.7	7.0	1.5	
8	5.0	7.0	1.3	
9	5.5	7.7	1.6	
10	7.2	6.2	0.8	
11	5.7	6.0	1.6	透明
12	6.2	7.0	1.5	
13	6.2	6.9	2.1	

#### 鉄製カスガイ（第9図1～6）

第1号石室内からは鉄製カスガイが5本分発見された。その内3本は旧形を保っており、1本は刃部の一方を欠し、他の1本は刃

部のみの残片である。これらのカスガイにはいずれも内側表面に木質が残っていて、組合せ式の木棺の各部を固定したことがわかる。なお、これらのカスガイの出土位置からみて、カスガイの使用数量は6本であろうと推定される。

付表2. 第1号墳出土ガラス玉計測表  
(単位=mm)



第9図 鉄器実測図

#### 4. 小結

これまで述べてきたように、第1号墳はいくつかの点において特徴をもっている。これらを列記してみると、①石室の構造、②蛇行剣身、③三輪玉、④有孔円板、⑤ガラス玉などであるが、順次それらについて検討を加えてみたい。

まず、石室の構造についてであるが、先に述べたように、本石室はその構造において堅穴系横口石室というべきない様のものである。この堅穴系横口式石室は、堅穴式石室から横穴式石室への移行形態とされ、福岡市老司古墳第3号石室をその初現とし<sup>注1</sup>、これまで北九州地方に集中して発見されている<sup>注2</sup>。これらの古墳は時期的には5世紀代に比定されているものが多い。

次に蛇行剣身については、これまで石川県狐塚（狐山）古墳、兵庫県龜山古墳、京都府南原古墳、長野県フネ古墳などの例から知られているが、発見例はきわめて少ないようである<sup>注3</sup>。この内、4世紀後半に比定される狐塚古墳の例は二曲の剣身で、本例に酷似している<sup>注4</sup>。曲身である正倉院の手鉾は伎楽用の道具であって実用武器ではないとの指摘があつて<sup>注5</sup>、本出土例についても実用性の有無を確かめる必要があると思われる。いずれにしても、この蛇行剣身または曲身剣と称される遺物がその形態から推して、呪術的な機能を付与されていた可能性が強い。あるいは、被葬者の生前の権威を象徴するものであったかも知れない。

三輪玉については、既に述べたように多くは大刀に伴って発見されている。そしてこのような大刀を玉纏大刀と称しているが、本例の場合は剣に伴う点において特徴がある。この場合においては剣に近接して9個の石英製三輪玉が出土している<sup>注6</sup>。

金銅製三輪玉は、横穴式石室内からの発見がほとんどで、時期的には5世紀後半ないし6世紀中葉にかけての所産とされている（付表3）<sup>注7</sup>。しかし、福岡県稻童21号古墳は堅穴系横口式石室を内部主体とする円墳であるが、石室内から金銅製三輪玉を検出していることは注目すべきであろう<sup>注8</sup>。

番号	名 称	所在地	個数	墳形	主体部	伴出遺物
1	御三社古墳	群馬県富岡市七日市	3	前方後円	横穴式石室	青玉、埴玉、白玉、刀子片、須恵器
2	二子山古墳	群馬県前橋市総社町	4	前方後円	横穴式石室	金環、銀環、勾玉、鈴銅、頭椎大刀
3	將軍塚古墳	埼玉県行田市埼玉	5	円	横穴式石室	環頭大刀、馬具、金製勾玉、同平玉、銀製丸玉ほか多数
4	榎荷山古墳	滋賀県高島郡高島町	6	前方後円	横穴式石室	金銅冠、耳飾、杏、馬具、環頭大刀、須恵器ほか
5	坊主山第1号墳	京都府宇治市広野町	13	前方後円	木棺直葬	金環、銅鏡、銅鈴、直刀、馬具、玉類、須恵器ほか多数
6	海北塚古墳	大阪府茨木市福井	14	円	木棺直葬	鏡、勾玉、山梶玉ほか
7	芝山古墳	大阪府枚岡市石切町	10	前方後円	横穴式石室	馬具、刀、剣、須恵器ほか
8	藤の森古墳	大阪府藤井寺市野中	?	円	横穴式石室	玉、短甲、鉄鏡
9	上ノ山古墳	山口県下関市鞍羅木	5	前方後円	?	勾玉、六斎鏡、刀、剣ほか
10	鳥田塚古墳	佐賀県唐津市鏡	5	前方後円	横穴式石室	勾玉、銅鏡、鐵刀、六斎鏡
11	龍王崎第4号墳	佐賀県杵島郡有明町	4	円	横穴式石室	鏡、金銅鏡、金銅製鏡、挂甲、刀、須恵器ほか
12	稚童第21号墳	福岡県行橋市稚童	2	円	竪穴系横口式石室	短甲、刀、檢出中、鍔崎、馬具、三環鏡ほか
13	空長第1号墳	広島県広島市祇園町	1	円	竪穴系横口式石室	剣、有孔円板、鐵製ガスガイ、ガラス玉ほか

付表3 金銅製三輪玉出土古墳地名表

三輪玉は一般には5個あるいは7個を1組として大刀に取り付けられた例が初現的であるとし、以後次第に数がふえるといわれる<sup>注10</sup>。この点空長第1号墳からは金銅製のものがわずかに1個と少ないが、これはたとえば木製三輪玉のような遺存しにくい材料のものを使用した結果かも知れない。

有孔円板については、広島県下の古墳出土例はきわめて少なく、付表4に示すとおりである。この内、地蔵堂山第1号墳の例は大量15個が一括出土しており、その出土状況は垂飾のごとき様相を呈していたということで注目されるが<sup>注11</sup>、空長第1号墳においては、剣のそばに静置された感じであった。

番号	名称	所在地	有孔円板 種類・個数	墳形	内部主体	伴出遺物
1	三玉大塚古墳	双三郡吉舎町三玉	双 孔 1	帆 立 貝	竪穴式石室	鏡、筒形銅器、刀、槍、 胃、短甲、菅玉、小玉ほか
2	国成古墳	深安郡神辺町中条	双 孔 9	円	粘土郭	鏡、鍤、鎌、刀子、勾玉、 菅玉、小玉
3	川西第3号古墳	三好三着町川西	双 孔 3	円	箱式石棺	
4	地蔵堂山第1号墳	広島市高陽町金平	双 孔 15	方	土壙	素環頭大刀、刀、鉢、斧、 鎌、鍔先ほか
5	空長第1号墳	広島市祇園町西山本	單 孔 1	円	竪穴系横口 式石室	劍、三輪玉、ガラス玉、刀 子、カスガイほか

付表4 広島県有孔円板出土古墳地名表<sup>注1,2</sup>

ところで、有孔円板を有する古墳は時期が5世紀代および6世紀前半に限られているようである。このうち、竪穴系横口式石室を内部主体とする福岡市飛山第1号墳からは、単孔の有孔円板4個が出土しているが、この場合は5世紀後半に比定されている<sup>注1,3</sup>。

最後にガラス玉についてであるが、これらはその出土位置からみて、首飾りと考えることは困難であろう。

本主体部の被葬者の頭位は、三輪玉を飾りつけた剣1および有孔円板のあたり、つまり西側と考えられるが、その場合、ガラス玉は被葬者の右足首に装着された足玉の可能性もあるが速断はできない。

さて、以上のような特徴をあわせもった空長第1号墳の築造の時期はいつごろであろうか。大ざっぱに考えて遅くとも6世紀前葉、早ければ5世紀中葉頃とも考えられるが、5世紀後半のころとするのが妥当であろう。

注1 九州大学文学部考古学研究室『老司古墳』(1969)。

注2 福岡県教育委員会編『片山古墳群』

(『福岡県文化財調査報告』第46集, 1970)。

福岡市教育委員会編『和白遺跡群』

(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第18集, 1971)。

瀬高町教育委員会編『名木野古墳群』

(『瀬高町文化財調査報告書』第1集, 1977)。

福岡市教育委員会編『席田遺跡群』

(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第44集, 1977)。

注3 大和久震平「桑57号墳の発掘調査」(『月刊文化財』第98号, 1971)。

注4 大塚初重「刀剣と槍矛」(『世界考古学大系』3, 1975)。

大和久震平「前掲書」

注5 大和久震平「前掲書」

- 注6 宗像神社復興期成会『沖の島』(1958)。
- 注7 堤圭三郎「宇治坊主山古墳出土の三輪玉について」(『史想』第14号, 1968)。
- 注8 小田富士雄「古墳文化の地域的特色—九州」  
(『日本の考古学』IV, 1966)。
- 注9 三輪玉の集成については、堤圭三郎「前掲書」に詳しい。
- 注10 堤圭三郎「前掲書」
- 注11 広島県教育委員会編「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」,  
(1977)。
- 注12 地名表の作成にあたっては、広島大学潮見浩教授の教示を得た。
- 注13 福岡市教育委員会編「前掲書」(1971)。

## 第4章 第2号墳

### 1. 古墳の構造

第2号墳は第1号墳の北約23mのところに位置する。墳形は円墳で、直径m、高さ約1mほどの規模を有し、主体部は箱式石棺である。封土は、第1号墳と同様にかなり流出していた。地形的な関係によって西方斜面においては不明瞭であるが、幅130cm、深さ20cmほどの周濠がめぐっている。

### 2. 主体部の構造(第11図)

主体部は、墳丘の中央やや南西寄りに位置し、主軸をN84Eにとる内法の全長220cm、幅は東側で46cm、西側で35cm、高さ48cmの箱式石棺である。

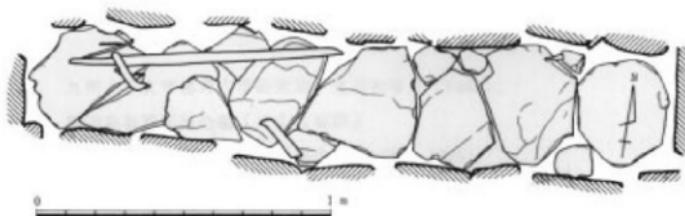
天井石は7枚前後で構成されたものであろうが、西側の2枚が原位置を保つのみで、2枚が棺内に転落、他は抜き取られていた。

この箱式石棺は、265cm×90cmの長方形の土壤内に埋置され、四壁の根石を縱方向の広口積みとし、その上部を割石の横口積みによって高さの調節をしている。根石の掘り方は根石の形状によって異なる。また床面には割石を敷きつめる。

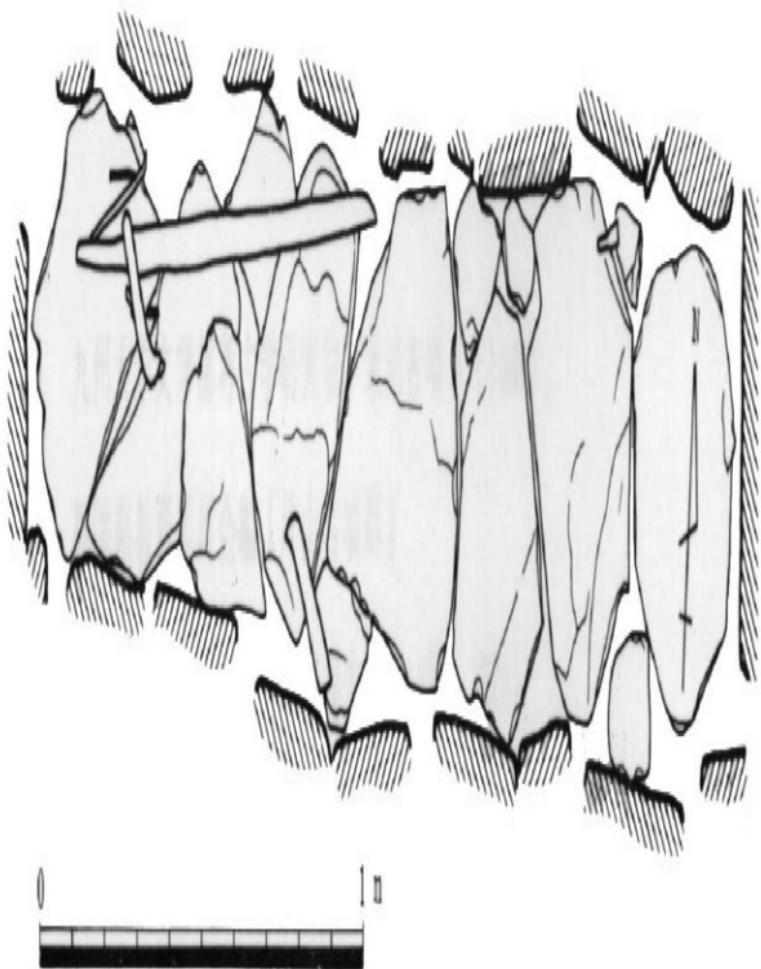
### 3. 遺物(第10図)

棺内から出土した遺物には、直刀、鉄鎌2、鉈、刀子3、鉄鏃があり、全て鉄器である。その出土状態は刀子残片を除くほかはいずれも原位置を保っており、特に棺内西側に集中して検出された。

以下、それぞれの遺物について述べよう。



第10図 第2号墳遺物分布図



第11図 第2号墳石棺実測図

### 直刀（第12図）

この直刀は全長94.0cmの完成品で、鋒を東に向け、北壁に沿って出土した。刀全体にわずかではあるが木質が銹着し、特に茎部においては直径2.0mmの紐を繁巻きに柄巻きした痕跡が認められる。茎部にはまた、基部に抉りが見られ、茎尻は斜めに切り落とされている。目釘孔は、直径3.0mmのものが2ヶ所穿たれている。

なお各部の計測値は次のとおりである。

全長	94.0 cm		
刃部		茎部	
長さ	78.2 cm	長さ	15.8 cm
幅		幅	
関部	3.9 cm	抉入部	2.2 cm
中央	3.4 cm	中央	2.2 cm
鋒より	8 cm 2.9 cm	茎尻	2.0 cm
の部分			
背の厚さ		背の厚さ	0.8 cm
関部	0.9 cm		
中央	0.9 cm		
鋒より	8 cm 0.7 cm		
の部分			



### 鉈（第13図）

この鉈は棺内の西寄り、北壁に沿った状態で出土した。鋒は東向きである。関部で折損するほかはほとんど旧形を保ち、鋒から4.1cmのところより木柄が始まる。茎部にはその両面に木質が良く残り、木柄の装着は差し込みによるものであることがわかる。また茎尻のあたりには、幅4mmほどの皮紐を巻いているのが観察される。断面三角形の刃部は、約30度の角度で上ぞっている。

各部の計測値は次のとおりである。

第12図 直刀実測図

全長 19.3 cm (木柄部分を含む)

刃部 長さ	4.1 cm	茎部 長さ	14 cm 前後
幅	1.1 cm	幅	1.0 cm
厚さ	0.3 cm	厚さ	0.4 cm

### 鎌（第13図2・3）

2本の鎌はいずれも棺内から発見されたもので、1は鉈の近くから、他は南壁に接して出土した。

前者は完形品で、全長15.5cm、基部の幅2.9cmを測り、先端が内弯し基部を直角に折りまげる。木柄のつく部分は、刃部よりわずかに幅広となっている。

後者は3個に折損していたが、接着可能である。全長16.9cm、基部の幅3.3cmを測り、前者に比べやや大きく、基部の折り返しも逆方向である。刃部先端はわずかに内弯し、基部の幅は刃部より狭くなる傾向があり、全体的に古調を示している。

なお、出土状態からみて、両者共に刃部先端を上として側壁に添え置いたものと考えられる。

### 小形刀子（第13図4）

鉈の下部から出土したこの刀子は、全長が4.3cm、刃部の長さ2.2cm、最大幅0.9cm、背の厚さ0.2cmの完形品である。刃部・茎部共に刃がついているが、茎部には木質が付着していることから両者の区別は判別できる。

この刀子の用途は不明であるが形態からみて、鉈と同様に比較的長い柄をつけたけずり小刀の一種であろうか。

### 刀子（第13図5）

鎌1の下から出土したこの刀子は、全長が11.4cm、刃部の長さ7.9cm、背の厚さ0.4cmの完形品である。

刃部の最大幅は間にあって1.9cm、鋒に近くなるにつれわずかに反りをもちながら幅狭くなっている。

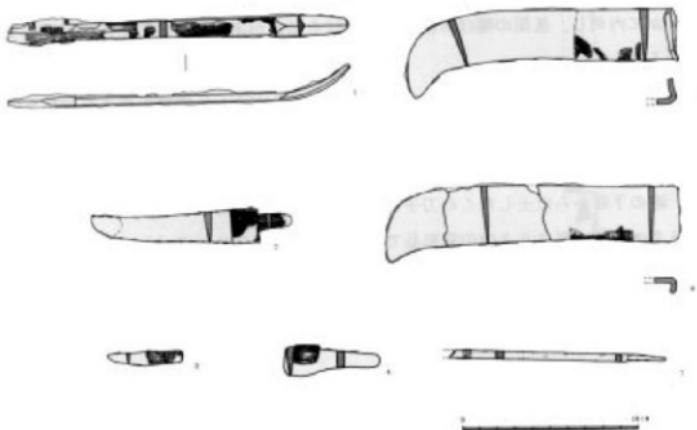
茎部は矮小で長さ3.5cm、幅1.0cmを測るにすぎない。茎部の基部には木柄の上から幅1.5cmの皮を柄巻きにし、その上を黒漆塗りとしている。

### 刀子残片（第13図6）

棺内のやや東寄り、北壁に沿って出土したこの刀子残片は、茎部から間にかけてのもので、現存長5.6cmを測る。全体的には先出の刀子と同様の形態のものであろうと思われる。

### 鉄鎌残片（第13図7）

鉈と北壁の間より出土した鉄器は、その形状よりみて鉄鎌の茎部であろうと思われる。現存長12.0cm、一辺0.4cmの角棒状をしており、茎尻に近くなるほど細かくなっている。刃部の形態は不明である。



第13図 鉈・鎌・刀子・鉄鎌実測図

#### 4. 小結

この第2号墳の主体部は箱式石棺ではあるが、割石を1~3段横口積みすることによつて側壁の高さを補足調整しており、竪穴式石室の構築法のなごりがかなり残っている。

第2号墳の被葬者の頭位は東側とも思われるが、直刀との位置関係において、西側とするのが妥当と考えられる。

また、棺内からの出土遺物も棺内東側は搅乱を受けている可能性があるものの、鉄製品に限られている点は古式古墳に近い様相を呈するもので、空長第2号墳の築造時期は5世紀末ないし6世紀初頭の頃ととらえたい。

## 第5章 第3号墳

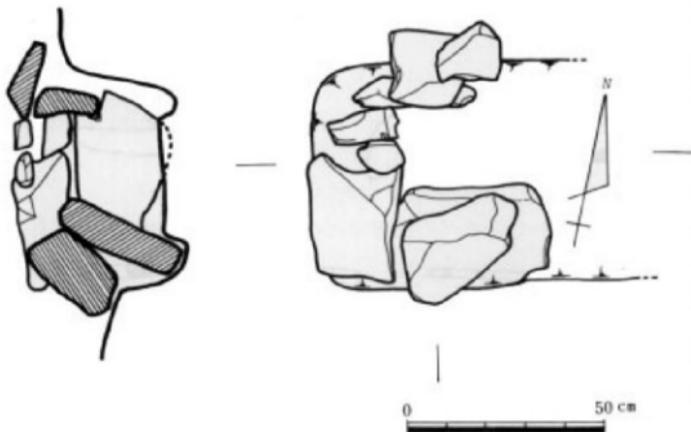
### 1. 古墳の構造

第3号墳は第2号墳の北側に接する円墳で、墳丘の規模は直径6.5m、高さ0.8m、空長古墳群中ではもっとも小さい。

古墳の周囲には幅120cm、深さ20cmほどの周濠がめぐっており、内部主体は箱式石棺である。

### 2. 主体部の構造(第14図)

すでに述べたように箱式石棺を内部主体としている。しかし、棺を構成する大半の石材が抜きとられ、西側奥壁と考えられる部分とそれに接する南壁の一部が残されているのみであった。したがって、石棺の規模、構造等については不明な点が多い。



第14図 第3号墳石棺実測図

### 4. 小結

以上述べたように、第3号墳は特に主体部が損壊しているため不明な点が多く、ために、築造の時期を知る手がかりはほとんどない。

しかし、わずかに残された西壁と南壁の一部の石積みの手法は、第2号墳の場合と全く同じである。また、第3号墳の周濠が、第2号墳の墳丘に切り入っている。速断は慎まなければならないが、第3号墳の築造は石積みの手法および占地の条件などから第2号墳とほぼ同時期、それも若干後出の頃と考えて良いのではないか。

## 第6章 第4号墳

### 1. 古墳の構造

第4号墳は第1号墳と第2号墳の中間東寄り平坦地に位置し、第1号墳とは南西部部分で、第2号墳とは北西部部分で接している。

墳形は円墳で直径8mを測るが、高さは封土の東方急斜面への流出がひどいために判断としない。主体部は第1号墳に酷似し、古墳の周囲には幅130cm・深さ25cmほどの周濠がめぐっている。

### 2. 主体部の構造（第15図）

主体部は墳丘のほぼ中央にあって、主軸方向をN56Eにとり、内法の全長275cm、最大幅58cm、最小幅46cm、高さ69cmほどの規模を有する竪穴式石室構造のものである。

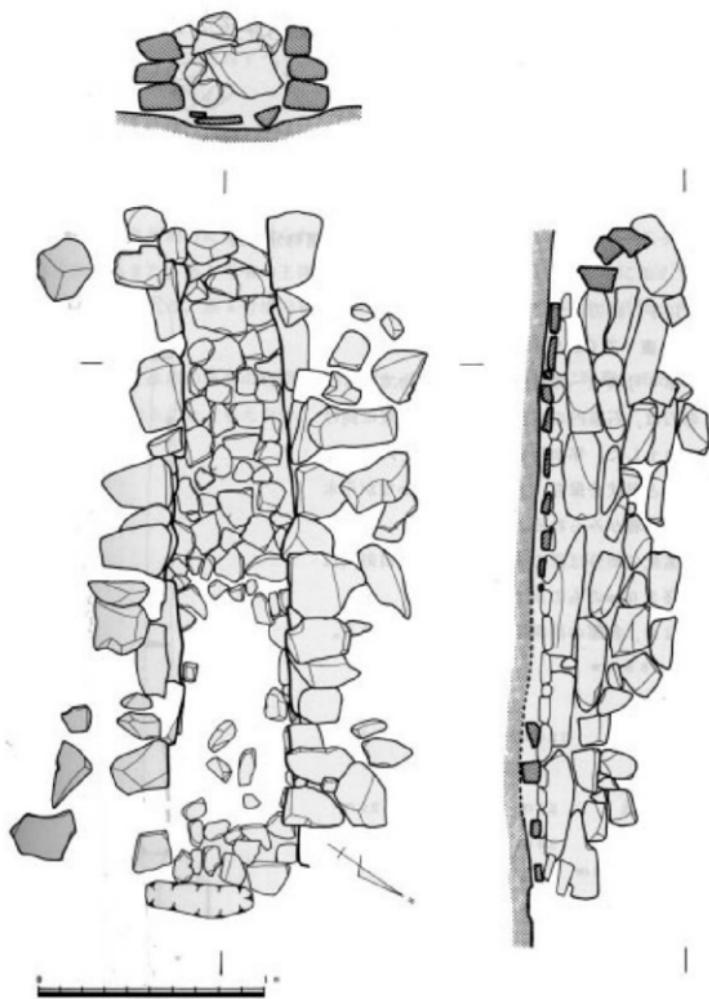
天井石は一部の側壁最上段の割石とともに大半が抜きとられ、2枚が石室内に落ちこんでいた。また、石室の東寄りの部分は攪乱がひどく、東側奥壁および床石の一部は失われている。

南北両壁は第1号墳の場合と同様の板石による小口積みまたは横口積みであるが、第1号墳と異なるのは使用されている石材に扁平な河原石の混用がかなり目立つ点であろう。このことは床石についても同じで、第4号墳の場合、床石として5~15cmの大の平らな河原石が半数近く使用されている。床面はわずかながらもU字形に構成され、棺が割竹形の木棺であったことがわかる。

なお、側壁の石積みは旧状を保っていると考えられる部分において5段まで認められ、第1号墳に見られたような控え積みはほとんどない。

### 3. 遺物（第16図）

本主体部から検出された遺物は、石室内の西寄りから南側壁に沿って出土した直刀とその鋒部付近から出土した刀子残片のみであった。直刀は出土した位置および出土状態からみて原位置を保っているものと考えられる。刀子残片は刃部の一部で旧状がどのようなものであったかは不明である。



第15図 第4号墳石室実測図



第16図 第4号墳遺物分布図

以下、直刀について詳述しよう。

#### 直刀（第17図）

第4号墳唯一の石室内出土の遺物であるこの刀は、石室内の南西部分から鋒を東に向けて出土した。第2号墳出土の直刀と同様、ほとんど旧状を保ち、刀全体にわずかながら木質の銹着がみられる。

茎尻の部分は深く抉られており、目釘穴は直径3.0mmのものが2ヶ所ある。

なお、各部の計測値は次のとおりである。

全長 88.1cm

刃部		茎部	
長さ	72.4cm	長さ	15.7cm
幅		幅	
関部	3.8cm	関部	2.9cm
中央	3.3cm	中央	1.6cm
鋒より8cm	2.5cm		
の部分			
厚さ		厚さ	
関部	0.8cm	中央	0.7cm
中央	0.7cm		
鋒より8cm	0.5cm		
の部分			

#### 4. 小結

本主体部において注目すべきは西壁の構造であることはすでに第3章において述べたところである。

本主体部の西壁は、10~20cm大の角礫を土砂とともに無造作に積みあげた感じのもので、横穴式石室にみる閉塞施設の構造そのものである。また南北両壁は若干ではあるが西壁の後方に向って延びており、羨道を思わせる。以上のこととは、北九州地方に多く見られる竪穴式横口式石室と共に通るものであって、本主体部もまた、第1号墳の主体部とともに竪穴系横口式石室の範疇に加えて良いかと考えられる。第4号墳の被葬者の頭位は直刀の位置からすれば西側と考えられる。

なお、本主体部の築造の時期については、第1号墳とほぼ同じ時期、それもやや後出の墳のものととらえたい。

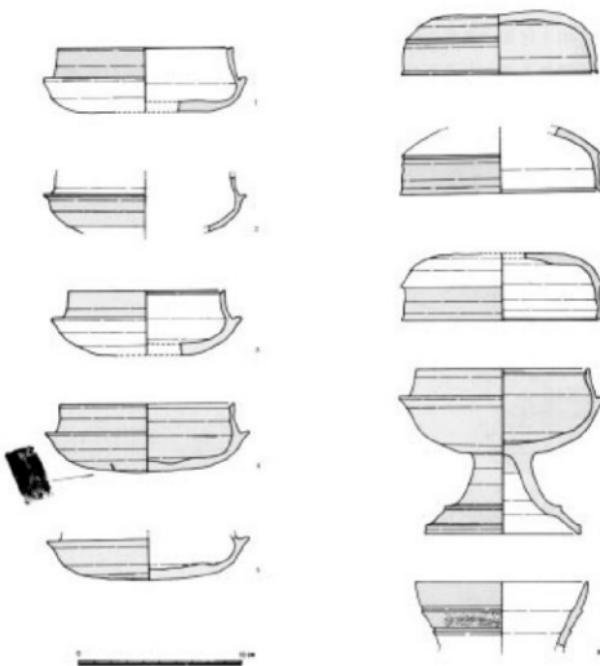


第17図 直刀実測図

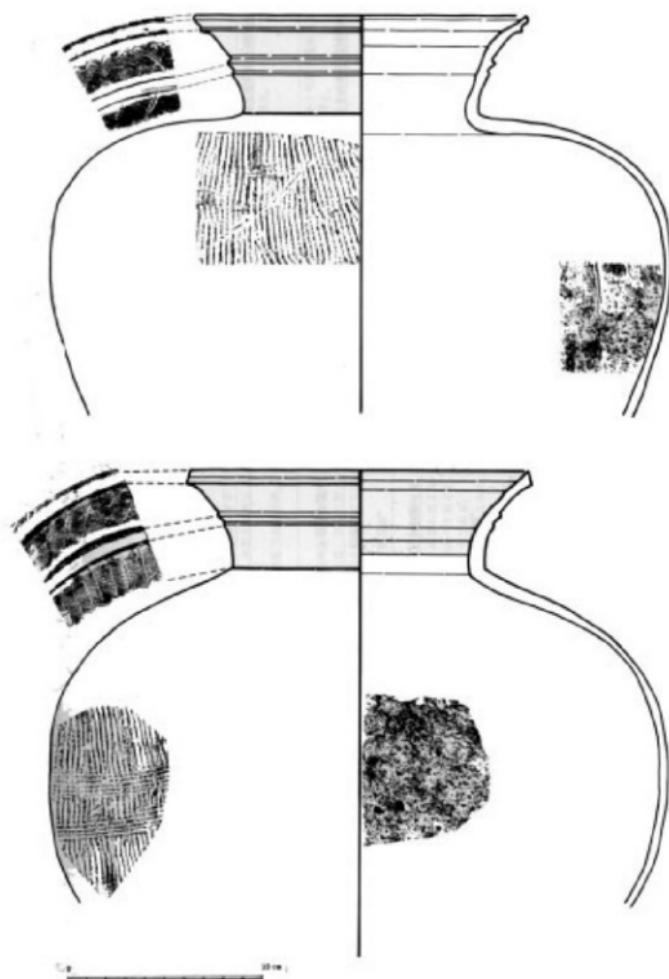
## 第7章 須恵器

これまで述べてきたように、空長古墳群においては主体部内からの土器類の出土は皆無であった。また、墳丘における埴輪や葺石などの外表施設も見出せなかったが、第1号墳の封土中より少量の土師器細片と第2・第3・第4号墳の封土中および周濠付近から若干量の須恵器の出土をみた。このうち、須恵器では坏身・坏蓋・有蓋高坏・直口壺・中型甕などの器形が含まれるが、そのいずれも焼成堅緻で丁寧な作りによる古式の様相を呈している。

本章においては、検出した須恵器のうち計測可能ないくつかをとりあげてその特徴をまとめてみたい。



第18図 空長古墳群出土須恵器（中型甕）実測図



第19図 空長古墳群出土須恵器（壺、高環・直口壺）実測図

付表5 空長古墳群出土須恵器一覧表

上部 番号	器種	口径	高さ	最大径	形状の特徴	手法の特徴	地味	胎土	色調	備考	
1 外壇	外壇	10.7 cm	4.0 cm	12.4 cm	丸あがりはわずかに内傾し、高さ12.0cmに達する。縁 内面は内側に斜めに傾き、内側の底には丸みあること があがり部底に溝がある。腹部・底部はほとんど 全面に輪郭な感じが強く。	まきあげ。本打き調整による。 内面は底面全体に施して いる。ロクロ回転は左方向。	さわめて堅緻 なまきあげである。	さめこまかならぬ灰 砂粒を含み積造り されている。	黒灰土。	第4号墳周縁部黒 土出土。	
2 外壇	外壇	7 cm	7 cm	12.5 cm	丸あがりは浅く内傾し、厚さ11.0cmに達する。 内面は内側に斜めに傾き、内側の底には丸みあること があがり部底に溝がある。腹部・底部はほとんど 全面に輪郭な感じが強く。	まきあげ。本打き調整による。 ロクロ回転は右方向。	同上。	同上。	黒灰土。	第4号墳封土から 出土。	
3 外壇	外壇	9.5 cm	4.0 cm	11.6 cm	丸あがりはわずかに内傾し、高さ11.0cmに達する。 内面は内側に斜めに傾き、内側の底には丸みあること があがり部底に溝がある。腹部・底部はほとんど 全面に輪郭な感じが強く。	まきあげ。本打き調整による。 ロクロ回転は左方向。	同上。	同上。	黒灰土。	第4号墳周縁部黒 土出土。	
4 外壇	外壇	10.7 cm	4.2 cm	12.5 cm	丸あがりは浅く内傾し、高さ11.0cmに達 する。縁部は内側に斜めに傾き、内側の底には丸み あることがあがり部底に溝がある。腹部・底部はほと んど平底である。	まきあげ。本打き調整による。 ロクロ回転は左方向。	同上。 体部器表にヘラ記号が認められる。	同上。 体部器表に白底が認め られる。	同上。	暗青灰色。	第2号墳丘西側か ら出土。
5 外壇	外壇	7 cm	7 cm	12.4 cm	丸あがりは浅く内傾し、高さ11.0cmに達する。 内面は内側に斜めに傾き、内側の底には丸みあること があがり部底に溝がある。腹部・底部はほとんど平底で ある。	まきあげ。本打き調整による。 ロクロ回転は左方向。	同上。	同上。	同上。	第3号墳封土中から 出土。	
6 外壇	外壇	12.1 cm	3.9 cm	11.5 cm (大井 田原)	丸あがりよりは丸底である。受 部はわずかに内傾する。 内面は内側に斜めに傾き、内側の底には丸みあること があがり部底に溝がある。腹部・底部はほとんど平底で ある。	まきあげ。本打き調整による。 ロクロ回転は左方向。	同上。	同上。	同上。	同上。	第4号墳周縁部黒 土出土。
7 外壇	外壇	12.4 cm	7 cm	12.5 cm (大井 田原)	丸あがりと底部の凹は1.5cmに近くものと思われる。体 部底はわずかに内傾する。口縁部は内側する。	まきあげ。本打き調整による。 内面のナメが顯著である。	さわめて堅緻。 大井田原体に緑褐色の 自然釉がかかる。	さめこまかならぬ灰 砂粒と黒素円を含む。 と。	暗青灰色。	第4号墳周縁部黒 土出土。 大井田原の細 目が第4号墳周縁部 黒土から出土している。	
8 外壇	外壇	12.4 cm	4.2 cm (大井 田原)	12.4 cm (大井 田原)	丸あがりよりは丸底である。受 部はわずかに内傾する。 内面は内側に斜めに傾き、内側の底には丸みあること があがり部底に溝がある。腹部・底部はほとんど平底で ある。	まきあげ。本打き調整による。 ロクロ回転は左方向。	同上。	同上。	同上。	同上。	第2号墳周縁部黒 土出土。 大井田原の細 目が第4号墳周縁部 黒土から出土している。
9 内壇	内壇	10.2 cm (9.5 cm 脚部)	10.2 cm (5.2 cm 脚部)	12.7 cm (5.1 cm 脚部)	内部の丸あがりは内傾しており、1.0cmを測る。口縁 部は丸く内側底面にヘラ様によじる1系の彫痕を有す る。	まきあげ。本打き調整による。 ロクロ回転は左方向。	同上。	同上。	同上。	同上。	同上。
10 内壇	内壇	7 cm	7 cm	7 cm	内側の丸あがりは内傾している。 外上方にのせる口縁部前面三角形の凸唇を2条めぐ らし、凸唇の間には彫縁の波状文をめぐらしてい る。	まきあげ。本打き調整による。 ロクロの回転方向は不明。	さわめて堅緻。 外部内面のナメが顯著である。	同上。	同上。	同上。	第2号墳丘西側地 から出土。
B (D)	少部分	7 cm	7 cm	31.8 (30.0) (30.0)	口縁部は崩壊形で底を残しながら、外反し、縁部は内 側に丸みをおびる。縁部中央には複数三角形の凸唇 を2条めぐらす。口縁部底面に複数波状文をめぐら している。体部の質はよく張っている。全体に内薄な 感じを受ける。	まきあげ。 器表は平行叩き目文を残し、内面 は叩き目。完全に消去され。水引 を調整されている。	同上。	さめこまかならぬ灰 砂粒を含み積造り されている。	全表面には青灰 色の自然釉がかかる。	同上。	第2号墳周縁部黒 土出土。
C (D)	少部分	7 cm	7 cm	31.3 (30.0) (30.0)	口縁部は崩壊形で底を残しながら、外反し、縁部は内 側に丸みをおびる。縁部中央には複数三角形の凸唇 を2条めぐらす。口縁部底面に複数波状文をめぐら している。体部の質はよく張っている。全体に内薄な 感じを受ける。	まきあげ。 器表は平行叩き目文を残し、内面 は叩き目。完全に消去され。水引 を調整されている。	同上。	さめこまかならぬ灰 砂粒を含み積造り されている。	全表面には青灰 色の自然釉がかかる。	同上。	第2号墳丘東側地 から出土。

一覧表に示したごとく、本古墳群出土の須恵器はいずれも最古式といわれる須恵器の形態的特徴を具備しているようである。このことは本章では割愛した計測困難な須恵器片についても同様である。これら一連の須恵器は、田辺昭三氏等による陶邑古窯址群の型式分類のうちTK208に似るが、その前段階とされるTK216に共通する点も見受けられるようである。

注1 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群1』(1966)。

注2 横浜市教育委員会鈴木重信氏より古式須恵器の図版資料の提供を受けたほか多くの教示を得た。

## 第8章 結語

広島県の西半部、すなわち古代安芸国に属する広島市とその周辺では箱式石棺を内部主体とする古墳がしばしば発見されている。空長古墳群も当初は、箱式石棺を内部主体とする円墳群と予想されていたものである。しかし、こうした予想に反して空長古墳群からは広島県下では初見の竪穴系横口式石室2基が発見された。この竪穴系横口式石室については搅乱を受けていて不完全な形で発見されたためになお検討すべき余地は残るが、北九州を中心として発見されている多くの例からみてほぼ竪穴系横口式石室と断定し得るものと考える。

第1号墳は竪穴系横口式石室という内部主体の構造もさることながら、その出土遺物の構成は特に注目してよいものであろう。このうち、蛇行剣身と長剣の柄部が反対方向に位置している点は理解に苦しむところであるが、あるいは追葬による結果とも考えられる。すなわち、第1次埋葬は頭位を東向きとして蛇行剣身を副葬し、第2次埋葬は頭位を西向きとして長剣、三輪玉、有孔円板等を副葬した可能性がある。この場合11個のガラス玉は紐通しにした状態で第1次埋葬の際に頭部付近に静置されたと考えることもできよう。この追葬の可能性については、竪穴系横口式石室本来の機能と九州にみられる諸例を考え合わせれば十二分に有り得ることである。なお同じ竪穴系横口式石室を内部主体とする第4号墳については、かなり搅乱を受けているために、追葬の有無は不明である。

空長古墳群を構成する4基の円墳のうち第2号墳と第3号墳は箱式石棺を内部主体としている。これら箱式石棺は、その構造から簡略化された竪穴式石室と考えることもできようが、その規模（容積）や築造法からみて竪穴式石室の築造の技法を強く受けついだ箱式石棺と考える方がより妥当であろう。とはいえ、第2号墳の内部主体は箱式石棺としては長大といえるものであり、棺内からかなり豊富な鉄製品の出土をみたことは注目に値する。

空長古墳群の各古墳の築造順位と築造の時期については、内部主体からの出土遺物の内容・占地の条件等からみて、一応は、第1号墳（5世紀後半）→第4号墳（5世紀後葉）→第2号墳（5世紀末ないし6世紀初頭）→第3号墳（6世紀初頭？）ととらえたい。このことは、主体部外からの発見ではあるが須恵器の内容によってもほぼ認められるところである。つまり、空長古墳群は、山本地区の湾入部において5世紀中葉と比定される三王原古墳と淨円寺、部谷山、上組などの後期横穴式石室墳の間隙を埋めるものと考えることができよう。

以上、空長古墳群の概括をまとめてみたが本報告書の作成にあたっては、不十分な調査体制と時間的制約から意を尽くせないまま終わってしまった点が少なくない。調査の成果については今後なお検討し、機会を改めて報告することしたい。

注1 竪穴系横口式石室については国学院大学乙益重隆教授より多くの教示を得た。

注2 福岡県教育委員会編「片山古墳群」

（『福岡県文化財調査報告書』第46集、1970）。

図版 1



1. 空長古墳群遠景（中央↓印）



2. 空長古墳群近景

図版 2



1. 空長古墳群全景（北より）



2. 空長第 1 号墳全景



1. 空長第1号墳全景



2. 空長第1号墳主体部全景（表土を除いたところ）



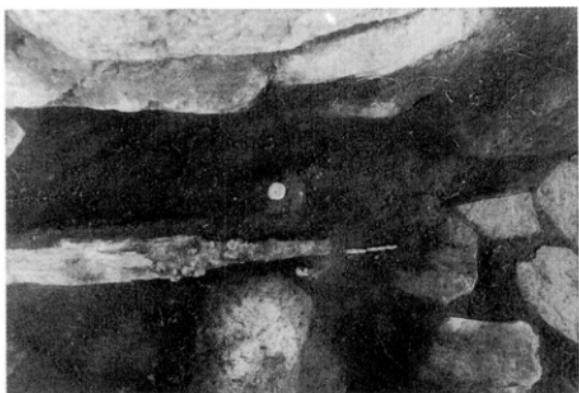
1. 空長第 1 号墳主体部全景（遺物出土状態）



2. 空長第 1 号墳主体部内鉄劍出土状態



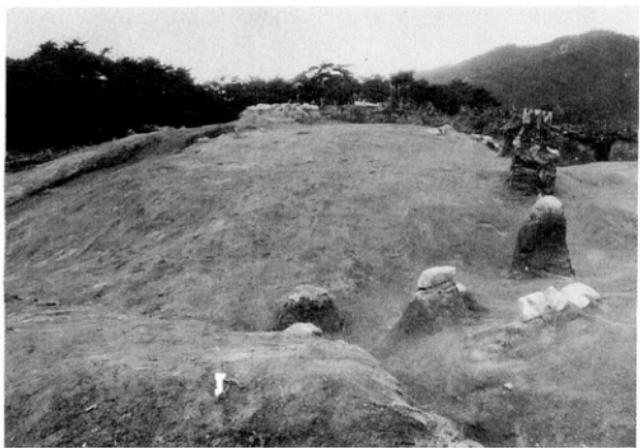
1. 空長第 1 号墳主体部内蛇行剣身出土状態



2. 空長第 1 号墳主体部内金銅製三輪玉，有孔円板出土状態



1. 空長第1号墳主体部の横口部



2. 空長第1号墳墳丘全景



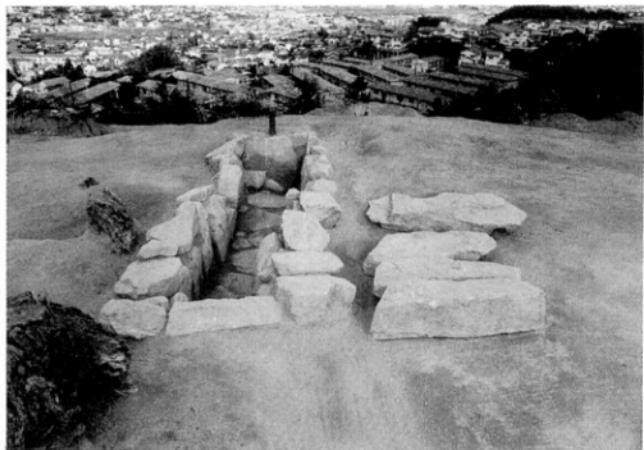
1. 空長第 2 号墳全景（調査前）



2. 空長第 2 号墳全景（調査後）



1. 空長第2号墳主体部全景（表土を除いたところ）



2. 空長第2号墳主体部（調査後）



1. 空長第 2 号墳主体部内遺物出土状態



2. 空長第 2 号墳墳丘全景

図版 10



1. 空長第2号墳周濠内（南東部）須恵器出土状態



2. 空長第2号墳墳丘裾（西側）須恵器出土状態



1. 空長第3号墳全景（調査前）

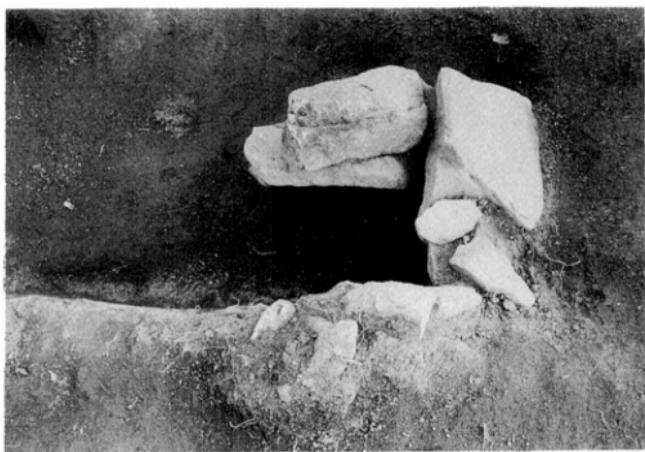


2. 空長第3号墳全景（調査後）

図版 1 2



1. 空長第3号墳主体部全景



2. 空長第3号墳主体部残存状態

図版 1 3



1. 空長第4号墳全景（調査前）



2. 空長第4号墳全景（調査後）



1. 空長第4号墳主体部全景



2. 空長第4号墳主体部内直刀出土状態



1. 空長第4号墳主体部の横口部積石状態



2. 空長第4号墳周濠（西側）



第 1 号 墓出土 遗物



第2号墳・第4号墳出土遺物

図版 1 8



( ) 内の番号は付表 5 の対応番号  
縮尺不同

空長古墳群出土須恵器

広島市の文化財第13集

**空長古墳群発掘調査報告書**

1978. 3. 31

編集  
発行

広島市教育委員会（社会教育課）

広島市国泰寺町1-6-34

TEL 45-2111（代）

印刷

有限会社 清弘社

広島市本川町2-3-8